



—湾岸・アラビア半島地域ニュース—

レバノン：イラン情勢がヒズボラに与える影響

(8月21日付現地仏語紙「ロリアン・ルジュール」紙)

21日付「ロリアン・ルジュール」紙に「イランとヒズボラの弱体化」と題したハッタード記者の論説記事が掲載された。その概要は以下のとおり。

1. アサド・シリア大統領のテヘラン訪問(8月19日)は、シリアとイランとの関係が強固なことを国際社会及びアラブ諸国に伝える明確なメッセージであった。本メッセージは、「両国関係の冷却化を目指していた者たち、又はイラン・イスラム共和国内部の問題が両国間の戦略的同盟関係を見直させると考えていた者たちは完全に誤っていた。両国関係は極めて強固であり続け、イラン内部の情勢は人々が信じるよりも安定している」と要約される。
2. しかし、アラブ外交筋は、はるかにニュアンスに富んだ見方をしている。同筋は、アフマディネジャード・イラン大統領が現在置かれている状況を、2004年に任期が延長されたラフド・レバノン大統領の最後の3年間と比較さえする。同筋によれば、大統領選挙後にイランで起きた事件は、国民と支配層の間に信頼関係の危機を生み出し、体制の危機までには至ってないとしても、ヒビがはいってしまい、西側の用語によれば、「より現代的で開かれたイスラム」による統治を望む反体制運動参加者数は増大する一方である。イランの体制支柱者たちが主張するように、これらの出来事が西側諸国によりエンカレッジされた、ないしは醸成されたかはともかくとして、再選された大統領が権力の行使に当たって一層の柔軟性を示す用意があることを未だ示していない状況下、人々の精神に中では変革の理念が大きな流れとなっている。
3. アラブ外交筋によれば、イランで起きていることを過小評価すべきでなく、一連のプロセスの引き金は引かれ、それは不可逆的なもので、イランの政治一般に変化が反映されるのは時間の問題に過ぎない。ヒズボラは、「民衆の気分の変化」と取りあえず評価しているイランでの出来事に留意しており、イラン情勢の変化を詳細にフォローしている。イランは、反体制デモが最も激しかった時、重大な経済危機を経験しつつあり、ヒズボラ、ハマス他の外国での運動を支援する代わりに、国内に努力を集中すべきとの声が上がった。ヒズボラ指導者の自信に満ちた声明にもかかわらず、ヒズボラは自分たちに対する有り得べきイランの政策変更の影響を強く意識し始めている。もちろん、宗教的次元の問題提起はされておらず、むしろイスラム共和国のヒズボラに対する援助と支持の度合いについてである。

ヒズボラの中核は、既に代替オプションを検討し始めている。その中には、レバノン及びアラブ世界にヒズボラがより良く根を下ろすというオプションも含まれている。イラン体制の弱体化は、ヒズボラに直接的影響を与え、その逆もまた真なりである。